

人を自由にする道具1

桐山岳大さん

私、若輩者ですので、わかることとわからないこととあります。聞いて下さるみなさんの方がご存じであることはたくさんあると思いますが、これから語る「人を自由にする道具」を一緒に考えて行っていただければ嬉しく思います。最初は、被害者の立ち位置を手放す話です。

生きていて何かの問題が起こると、自我の私としてはそれを排除したいと思います。問題に対し「やめてくれ、いやだ！」となってしまう。でも、それでは繰り返されるので、その問題には何か目的があつて起こっていると考えてみる、これを目的論と呼びます。これは浄土真宗の言う「大悲」と同じかもしれないと教えてもらいましたが、これがそもそも問題の被害者の立ち位置を脱する為の根本にあるんです。本来の私とは、被害者ではなく、「問題とは本来の自分が目覚めて行くために与えられたなんらかの願いである」と。被害者の立ち位置の



視点を手放し、本来の私の立ち位置から問題を観る。発想の転換です。

何か問題があると、普通はそのことをただ排除してしまふ。しかしそうすると、本来の自分の願いが聞き届けられないので、今までと同じ問題が繰り返しが起こされます。被害者の立ち位置を手放す前には、何が必要なのでしょうか？

一つ物語をお話します。むかしむかし山がありました。その山には三匹の山羊の兄弟姉妹が仲よく住んでいました。はじめはこの山には食べものもたくさんあつて満たされていた。ところがある時、その食べ物なくなつてしまつた。食べつくしてしまつたんです。そのこと自体に何らかの目的があるんですね。目的があるはずそのこと自体に何か大悲があるんです。

食べるものがなくなつてしまつた。さあ、どうしよう。この中の一匹が生まれて初めて外の世界を見てみたら、向こうの方に山

があるんですね。その山にはこちらの山にかつてあつた、今はもうなくなつてしまつた魅力的なものがいっぱいあるんです。ああいいなあ、あんなふうになつてみたい、あんな人々になつてみたい。その一番末っ子がじゃあお兄ちゃんお姉ちゃん僕が行つてみても来ると、ふもとまで下りて来ると、川が流れているんです。初めて気がつくんです、ここで。渡れないなあと思つてあつちこつちうろろろしてみると、一つだけ橋がかかっているところをみつけるんですよ。そうか、じゃこれを渡ればいいんだと思つて渡ろうとする、その橋の下から怪物が出てきて、ここを渡るならお前を食べちゃうぞ！と言う。そう言われると、この子は怪物に会わなかつたことにして帰っちゃうんですね(笑)。でも帰つても3人です。どうしようもないので、またそこへ行つてみる。でもその怪物とどう対話したらいいか方法を知らないからやっぱり帰ってくる。そこでこう、ぐるぐるぐるぐる繰り返してしまふのが自我の私としての普通の生き方、世間でよく起

怪獣に直面しないで、こうすればいいんだとスコップで穴を掘る人がいます。えっさえっさ掘つて掘つて、川の下にトンネルを掘るんですね。それで怪物に気付かれないように背後から向こうの山へ行く。でもこれは長続きしないんですね。このトンネルは、お酒だったり、共存だつたり、いろいろなものがある。トンネルを掘つて、怪物に気付かれない間、あつち側へ行つて得たいものを得る。でもそのたとえばお酒が切れると、こつちへもどつてきてしまふ。こういう生き方もあるんですね。これも一見自由なようだけど、自由でないです。橋のところに来てまっとうに怪物と交渉したいですが、なかなかこれもたいへんです。だつたらどうします？

食べ尽くしてしまつたこつちの世界が今まで生きてきた意識の世界です。自分が知っている世界です。川向こうは本来の自分が待っている無意識の世界です。その間に川が流れています。境界。こつちの世界には食べものがなくなつちやつた、新しいものは何もない。本来の自分が突き動かして、あるいは導いて、川向こ

うへ渡らせようとしているんですが、橋へ来ると怪獣が出て来る。怪獣は世間の声としても顕れます。怪獣と対話するには、怪獣を知る必要があります。

もう一つのお話は、お釈迦さまの過去生のお話です。お釈迦さまがブータマ・シツダールタとして生まれるいくつか前のお話として語られている話を、人々の無意識が創り出した話を、少々アレンジして語ります。

その頃のお釈迦さまは戦士だった。名前は五武器大師。あるとき大使は戦いを終えて帰って来た。帰る時に森の中で怪物に出くわした。でお釈迦さまは最初言葉で交渉したのですが、らちが聞かない。いよいよ聞いた。五武器大師ですから五つの武器を持っているんです。最初は一番長い槍を怪物に向かって投げた。そしてその槍が怪物にくっついてしまった。槍じゃだめだと次は弓を放ったが、何本放ってもバチバチバチとみんなくっついてしまった。次どうしたかという、剣を持って、その怪物に切りかかって行った。大分距離が近くなって来ましたね。だがその剣もバチバチとくっついてしまった。そうするともう飛び道具がなくなつたので、パンチをいれた。すると手もくっついてしま

た。つぎどうしたかという、蹴りを入れた。すると足もくっついてしまった。次どうしたかという、最後の手段、頭突きをくらわした。すると頭もくっついてしまった。さてどうするか。五体全部怪物にくっついてしまった。怪物がどう言ったかという、「まいったかこわっぱめー」五武器大師は「いや、まいってはおらん」と言った。「こうやってお前と一つになると、お前は、私の中にいることがわかった。おまえは私の自我である。おまえは私だ。」そして「まい」今度はその怪物の力が抜けてしまふ。「まい」と言ふコトバとともに、武器と大師の五体を放しました。

そして、その森も怪獣も消えてしまったのです。

この後、お釈迦さまは、あちこちでその怪物に会うんです。「お前はんばっているな。ご苦労さん」と言い、「もういいよ、お前をあの森の守護者に任命しよう、おいで」と場所を贈与したんです。その怪物はその森の守護者になっていくんですね、自分を大切にすること、自分を止めること、自分を空にする行をしていき続けるんです。

怪獣を観た上で、それを手放していくことが必要なんですね。